

個 が 生 き る 授 業

—— 集団の中で個を育てる ——

竹林地 毅 木村敦子
古田陽子 兼樹 透

1. 「個が生きる授業」とコミュニケーション

「授業はコミュニケーションだと考える」というのは、教育実習生との反省会でのある教官の言葉である。教育実習生が実習期間中悩んだこととして実習ノートに記入するのは、『子どもたちのかかわり合い方がよくわからない』、『授業がうまくいかない』などが多数をしめる。

実習生を前にして、まず考えるのは、いかに児童と実習生のかかわり合う場をたくさん用意するかということである。児童とのかかわり合いの中から実態を学ぶことができ、児童同志のかかわりも観えてくる。言い替えれば、児童とのコミュニケーションが十分にできていないところでは、より良い授業はできないともいえる。

「個が生きる授業」をコミュニケーションの視点から考えると、指導者と児童、児童相互のより望ましいコミュニケーションのある授業ともいえるであろう。

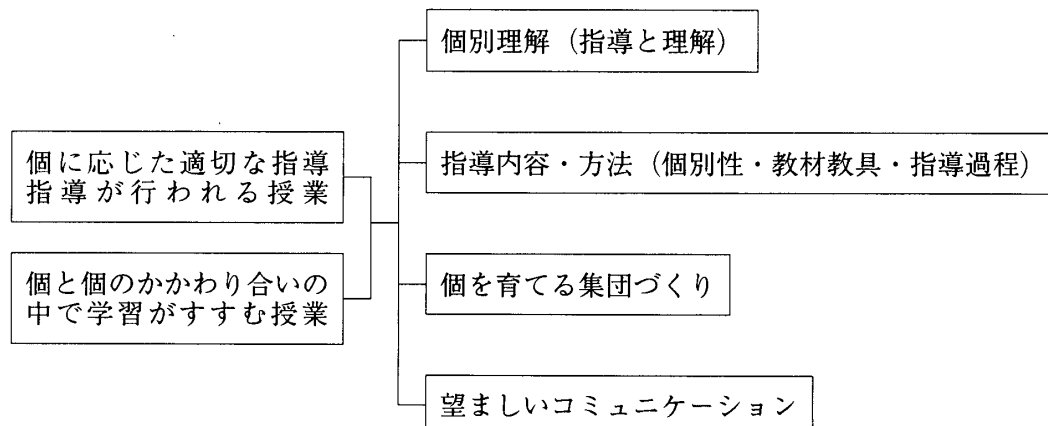
2. 「個が生きる授業」の構成

昨年度は「個が生きる授業」として、「個に応じた適切な指導が行われる授業」「個と個のかかわり合いの中で学習が進む授業」の2条件、また、構成のポイントとして「個別理解」、「指導内容・方法」、「個を育てる集団」の3つを考えた。今年度は更に、「より望ましいコミュニケーション」の構成のポイントとして付け加えたい。

より望ましいコミュニケーションとしては次のように考えている。

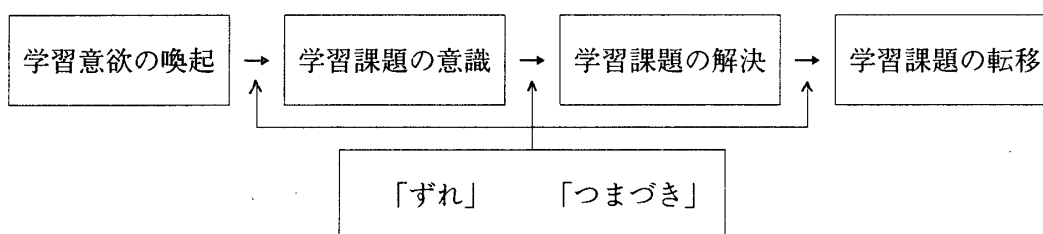
コミュニケーションとは、色々な手段を用いて、互いに感情や意志、知識などを伝達・交換する過程であると言われている。言葉だけでなく視線や表情などをも手段の大切なものと考えられる。授業場面、日常生活の中でそれらを用いて、指導者と児童、児童相互の間に、応答関係（伝達・交換）が豊かにあることがより望ましいコミュニケーションだと考える。このことは、たくましい生活力を育てることにもなるであろう。

特に授業場面では、指導者の示範や発問のあり方がコミュニケーションをスムーズなものとするために吟味される必要がある。より望ましいコミュニケーションのあり方を分析、検討する中で明らかにしていきたいと考えている。



3. 活動（ずれ・つまづき）の予想と手だて

授業の構成については、次のような学習活動の流れを基本的に考えてきた。



それぞれの学習活動で、指導者の考えていた活動と児童の活動に「ずれ」が生じてくるのをよく経験する。この「ずれ」は児童の側から捉えると「つまづき」ともいえる。この「ずれ」や「つまづき」こそが、指導のポイントであることが多い。例えば、液量の測定の指導で、液量を比べることを意識させることができずに水遊びになったり、ゲームの得点での数の指導で、得点の大小比較よりゲームの活動そのものが注目されてしまったり、加法計算で具体物を離れて数字だけになった時に計算ができなくなってしまう等がある。一人ひとりの「ずれ」や「つまづき」を分析することが、個に応じた適切な授業につながるであろう。

本校の養護学級では、従来より指導案に『目標行動』、『全体と個別に分けた指導上の留意点』の項目を設けてきた。『目標行動』とはその時間の指導目標を個の活動レベルで考えたもので、学習評価のポイントにもなっている。『個別の指導上の留意点』は予想される個の活動への指導の手だてを考えるようにしてきた。

これらは主として指導内容・方法の個別性に関わることであるが、目標行動の達成に向かって、指導過程の流れの中で、個の活動（ずれ・つまづき）を予想して、それへの指導の手だてをたくさん（できれば複数）用意しておくことが大切であろう。

そこで、指導案の項目に『予想される活動』を新たに設け、指導の手だてを指導案を書く段階でより明確に考えておくようにした。

| 学 習 過 程 | 予想される活動 | 指 導 上 の 留 意 点 | |
|---------|---------|---------------|-----|
| | | 全 体 | 個 別 |
| | | | |

授業の中での活動の予想を立てるためには、ひとり一人の実態の把握がしっかりとしているだけでなく、児童相互の関係も見極めていなくてはならない。先ほど述べたコミュニケーションの分析がこの項目に生かされるであろう。